2013年度
ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

書類提出期間：2013年 10月 1日（火）～ 2013年 10月 25日（金）17:00まで
書 類 提 出 先：学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課・独立研究科事務室
採　用　発　表：11月 29日（金）
学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板（10号館通路）に掲示予定
授　　与　　式：12月上旬（予定）

（A）ジェンダーフォーラム論文賞

対　　象：学部学生・大学院生（個人・団体）
支 給 額：優秀：１０万円，佳作：５万円
採用件数：１～４件
選考方法：論文審査
提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書＊　②論文（日本語２万字以内の未発表論文）
備　　考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

（B）活動・研究助成金

対　　象：学部学生・大学院生（個人・団体）
支 給 額：総額２０万円
採用件数：１～２件
選考方法：書類審査・面接
提出書類：①活動・研究助成金願書＊　②奨学金使途を含む活動・研究計画書（A4用紙　３枚程度　書式自由）
面接日時：2013年 11月 19日 18:00～を予定。個々の面接時間はあらためて連絡する。
面接会場：立教大学池袋キャンパス、16号館第２会議室（予定）
備　　考：採用者（団体）は活動･研究の**中間報告を翌年３月末に提出の上、最終的な報告書または論文を 11 月末に提出**すること。
提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】
標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、ＷＥＢ等に採用者名を記載することがある。以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、ジェンダーフォーラムのホームページ（http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/）を参照すること。

※ 詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス６号館１階）　Tel：03-3985-2307　E-mail：gender@rikkyo.ac.jp

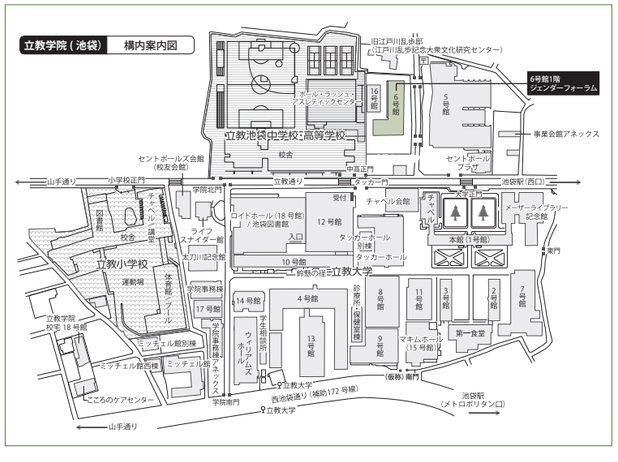
＊申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課窓口、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室窓口にあります。
ホームページ上からもダウンロードできます。（http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/）

ジェンダーフォーラムは2013年３月に、ミッチェル館から６号館へ事務室を移転しました。

立教大学ジェンダーフォーラム

開　室　日：毎週月曜日～金曜日
開 室 時 間：10:00～16:00(月火木金)13:00～18:00(水)
場　　所：立教大学池袋キャンパス６号館１階
TEL&FAX：03−3985−2307
E-mail　：gender@rikkyo.ac.jp
URL　　：http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。



Rikkyo Gender Forum
News Letter
Gem

Vol·29
2013.10.1
立教大学ジェンダーフォーラム

Ｇｅｍとは…光輝く宝石。
ジェンダーフォーラムの前身である女子学生寮「ミッチェル館」にちなみ、Gender Encountering at Mitchell（ミッチェル館でのジェンダーの出会い）を意味します。

2013年度公開講演会（2013年７月 10日（水））

おとずれる記憶、おくりとどける記憶 ― その後

講師：李 静和 氏（成蹊大学教授）

李静和氏にとって今回の講演は 2006年以来７年ぶりだそうである。７年前の講演のタイトルは「おとずれる記憶、おくりとどける記憶」であった。今回はその後の思索を共有することを求めて、「おとずれる記憶、おくりとどける記憶 ― その後」としたという。

といっても、今回の講演のためにさらに特定のタイトルが用意されていた。講演の際の配付資料には「残骸に触れること：岡村夏江（オハヂ）の黄麻の棲み殻へ（７月 10日のためのタイトル）」と示されていた。

残骸という題材から話は始まる。残骸は「すべてがなくなったけれども、すべてが残されているような空間」だという。そのように考えたことを時代、時間を交差しながら共有したい、ということで講演は始まった。

2006年の講演では、おとずれる記憶、おくりとどける記憶の主体は何なのかということを考え続けた時に、「客死」という概念に思い当たった。今回はもう一度この問題を考えてみて、「残骸」という言葉に出会ったという。

今回の講演ではこれまで共同作業を行ってきたアーティストの一人、岡村夏江（オ・ハヂ）氏の作品が紹介された。

オ・ハヂ氏の祖母は韓国の済州島出身であり、その背景として済州島での四・三事件が語られる。済州島四・三事件とは、1948年４月３日に始まった済州島民衆の抗争と、それに対して軍・警察・島外からの青年団などが引き起こした一連の島民虐殺事件である。当時、済州島では南北統一された国家の樹立を主張したデモに対して弾圧が行われ、数万人の死者が出たと言われている。済州島の方言は韓国本土と大きく違うため、住民の言葉が虐殺の基準となり、それを避けるために日本語が使われた。生き延びるための言語は日本語であり、そこでは「残骸」としての日本語という状況があった。

以上のような残骸についての語りの後で、オ・ハヂ氏のサンベを題材にした作品が紹介される。サンベとは、韓国で葬式に際して使われる布であり、黄色の大麻で出来ている。作品はオ・ハヂ氏の祖母が残した遺品をもとにしたものである。衣服に残る痕跡が個人の物語を語っており、オ・ハヂ氏がそれらを作る時間をたどっていくことにより、これもまた無くなった「残骸」の気配を再現しているかもしれないと李氏は言う。

李氏本人が言うように、今回の講演は彼女の主張を伝えるというよりは、これまで自分が出会ってきた様々な人たちに自ら応答することによって考えてきたことを、聴衆と一緒に考えたいという場なのだという。そしてオ・ハヂ氏の作品に対する李氏の解釈は、作者の意図とは異なるものとなるかもしれない、あるいは裏切ることになるかもしれないともいう。李氏の語った言葉以上の世界が彼女の背後に見え隠れする講演であり、我々はこの講演によって深い課題を突きつけられたことを知るのである。

豊田 由貴夫（ジェンダーフォーラム所長／本学観光学部教授）

豊島区男女共同参画推進条例施行 10周年記念講演会

『本気』で動けば何だって変えられる

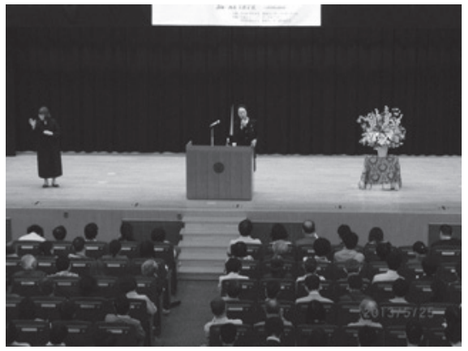
日　時：2013年5月25日（土）　　会　場：池袋キャンパス　タッカーホール
講演者：西水 美恵子 氏（元世界銀行副総裁）
主　催：豊島区立男女平等推進センター（エポック 10）　　共　催：立教大学ジェンダーフォーラム

風薫る5月の午後、元世界銀行副総裁として開発途上国支援に尽力された西水美恵子さんを講師に、本講演会が開催された。貧困のない世界を目指し取り組んできた活動の中でも、多くの学びを得たというブータン王国に関する話題が中心だ。西水さんはそっと言葉を置くように丁寧に聴衆へ語り掛け、講演が始まった。

ブータンといえば「国民総幸福量」が高いことが知られている。国民の幸福感が高いのは、国王と国民との絆の強さが表れているためだという。ワンチュク国王4世ら近年ブータンを治めてきた国王は、「『経済成長』とは、あくまで『国民の幸せ』という目標のための手段である」と説き、「心の健康」・「体の健康」・「環境」・「暮らし向き」など複数の面から人々の幸福感を向上させる政策を行ってきた。中でも「良い統治」という切り口において、国家を立憲君主制へ導いた際のエピソードが印象的だ。少数人口・多民族国家であるブータン国民が意思決定に関われる国家を実現するため、「絶対王政のままで問題がない」と主張する国民に対し、「（権力を握る）自分が悪王だったらどうするのか」とまで問い掛けて説得を試みたそうである。

このような発言や行動から、ブータン国王が言行一致のぶれないリーダーであることが見て取れる。常に国民を思いやる国王だという絶対的な信頼感があるからこそ、人々が幸せだと答えられる状況が生まれている。確かに、どんな小さなコミュニティであろうと、自分のことを真剣に考え動いてくれるリーダーがいるという自覚は、幸福感や安心感につながるものである。それを国家レベルで実行する国王の、本物の思考と行動力に感服せざるを得ない。

もう一つ心を捉えられたのは、ブータン国王の考えに倣い、「世界銀行という職場を、支援の対象者のみならず働き手の幸せも大切にする環境にしたい」という西水さんの思いだった。「私たちは職場でも家庭でも一人の人間である。欲しいのは、出勤するのが待ち遠しい職場と帰るのが待ち遠しい家庭である」との言葉。当たり前だが、なかなか実現が難しいことだけに、胸に響いた。



講演の開口一番、西水さんがゆっくりと発した言葉がある――「人の世に不変なものは変化のみ」。ワンチュク国王4世の言葉である。変化していく、変化させていく世の中で、いかに大切なものを見極め、進んでいくことができるか。本講演会は、豊島区が「男女共同参画推進条例」の施行10周年を迎えたことを記念して開催されたが、豊島区に限らず日本では男女共同参画の社会はまだまだ進んでいないのが実情である。共同参画社会を実現していくためには、男女ともに真摯にこの課題に向き合い、条例という言葉に、実社会を一致させるよう行動するより他にない。弛まぬ努力の先に、物事の実現がある。

岩井 理矢子（ジェンダーフォーラム運営委員／本学職員）

埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）主催　男女共同参画基礎講座

アカデミズムの扉を開く―2013―

開催日：2013年3月2日（土）　　会　場：With You さいたま
発表者：伊東泰幸、中島彩花（ともに立教大学）ほか東京女子大学3名、埼玉大学3名
コメンテーター：新田啓子（立教大学ジェンダーフォーラム所長／本学文学部教授）、田代美江子（埼玉大学教育学部教授）
＊所属は当時のものです。

「アカデミズムの扉を開く―2013―」では、立教大学の学部生2名が、東京女子大学・埼玉大学の学生・院生とともに、ジェンダーにまつわる「研究と学びの成果」を発表しました。

発表内容は、文学作品に見るジェンダーの逆転や家族関係、中高年女性のボランティア活動、フェミニズム・シティズンシップ論など多彩でした。世代や性差を超えた活発な議論が行われる本企画が、学問と暮らしを結びつける場として今後も継続されることを願います。

（ジェンダーフォーラム事務局）

第58回ジェンダーセッション　（2013年6月14日（金））

「アートを通じたメモリーワーク ―忘れないこと、〈語りなおす〉こと、新たな〈共〉を生み出すこと」

登壇者：中村 美亜 氏　（東京藝術大学助教）

語り、アート、そして＜共＞。これらは一体どのように関係しているのだろうか。講師の中村美亜氏は、私たちが普段意識することなく行っている営みの大切な側面に、光を当ててくれたように思う。

「語り」とは、実は私たちが世界を認識するときにいつも使っているツールだ。世界は常にフィクションとして、そしてあくまで主観的な構築物として成立する。しかし、自分と他者の語りが重なるとき、そこに＜共＞の領域が生まれ、そうして他者の理解が可能となる。ところで、アートは新たな「語り」を生み出し、新たな＜共＞を作ることを可能にする。つまり、社会を変え、コミュニティを生じさせる力を持つのだ。

その具体的な例として紹介されたのが、エイズ・アクティヴィズムを中心としたアート実践である。たとえば、HIV感染者の遺品をつなげ、記憶を集め、残すことを行ったエイズ・メモリアルキルト。京都を拠点とする芸術家集団ダムタイプと、その中心人物であり、HIV感染者であることを公表しその経験を作品に表現した古橋悌二。そして、身近にいるエイズ患者との共生を可視化していこうとするLiving Together計画。いずれも、エイズという現象を新たに「語りなおす」ことで、人々の認識を変え、新しい共生の空間を創出する動きであった。

これらのメモリーワーク、つまり記憶の＜語りなおし＞が、自己と他者の間の境界変容と、新たな＜共＞の形成を可能にするのだと、中村氏は説く。それによって、個人が孤立することなく、また＜共＞が固定された全体主義的な世界に陥ることなく、人々がつながりながら生きていくことが可能になるのだろう。質疑応答では、この日会場に集まった方々の様々な考え、悩み、願望が共有された。それらの問いかけに応えて、表現することを途切れることなく続けていこうと言う中村氏の、おそらくは実践に伴う様々な困難やジレンマを通して得た、静かな決意に満ちた「語り」が、深く心に残った。

松浦 恵美（ジェンダーフォーラム事務局／お茶の水女子大学他非常勤講師）

With You 学園　立教大学＆ With You さいたま共催講座
第1期　金曜日の夜コース（19:00～20:30）

主　催：埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）、立教大学ジェンダーフォーラム

この講座は、昨年に引き続き今年も立教大学と With You さいたま共催で全4回コースで開かれました。JRさいたま新都心駅改札口を出て、さいたまスーパーアリーナを背に徒歩4～5分、「With You さいたま」が会場でした。

第1回（6/28）「ディズニー文化とジェンダー」
　講師：豊田由貴夫（ジェンダーフォーラム所長、立教大学観光学部教授）
第2回（7/5）「ハンディキャップとセクシュアリティ」
　講師：河東田博（立教大学コミュニティ福祉学部教授）
第3回（7/12）「男女共同参画社会とはどのような社会か」
　講師：近藤弘（立教大学名誉教授、山梨英和大学特任教授）
第4回（7/19）「学校空間とジェンダー」
　講師：岸澤初美（立教大学兼任講師）

上記のような各テーマで、ディズニー映画によるプリンセスストーリーの刷り込み、知的障害者に対する性的暴力の現状と性教育の必要性、男女共同参画社会基本法の目指す社会、学校空間でのジェンダーの言葉と場面、などジェンダーに関わる多彩な内容で、終了間際まで活発な質疑応答が続きました。席が足らないほどの回もあり、講師との記念写真を撮る大学生の列には、つい微笑んでしまう一場面もありました。

君塚 紀子（ジェンダーフォーラム運営委員／本学職員）